

ワクワク はこね温泉

第 13 回

「芦之湯温泉」

菊川城司
(神奈川県温泉地学研究所)



写真 1 上空から見た芦之湯温泉の様子。

左端の山が駒ヶ岳で、その裾（画像の左下）に芦之湯温泉が広がります。駒ヶ岳の奥右側の山は神山、さらに奥の白い山は富士山です。駒ヶ岳の中腹には硫黄山と呼ばれる噴気地帯が茶色く広がり、そのあたりが湯ノ花沢温泉でゴルフ場があります。画像の右側には強羅や二ノ平など強羅潜在カルデラ内の温泉場が見えます。（撮影は 2005 年春、原田氏による）

■はじめに

箱根火山のめぐみによって生まれた箱根温泉について、シリーズでご紹介する 13 回目です。今回は、箱根二十湯のうち、芦之湯温泉のおはなしです。

芦之湯温泉は、箱根町芦之湯に湧出する温泉の総称で、駒ヶ岳の南東側の山裾に拓かれた閑静な温泉場で

す（図 1、写真 1）。

芦之湯という名前は、昔は葦の生え茂る湿原が広がっていたことから名付けられたといわれています。湿原は温泉場の開発と共に消えていきましたが、その名残は阿字ヶ池の付

近に残っています（写真 2、3）。

芦之湯温泉の南西側に位置する精進池（写真 4、5）の周辺には、中世に造られた数多くの石仏や石塔が点在しており、これらは「元箱根石仏群」として国の史跡に指定されています（写真 6、7、8）。精進池の脇に箱根町が設置している「石仏群と歴史館」では、芦之湯温泉の歴史や元箱根石仏群についてのパネルや解説をみることができます。

江戸時代の東海道と京街道を踏襲して東京と大阪を結んでいる国道 1 号線（総延長 760.9km）の最高地点（標高 874 m）は、芦之湯温泉の旅館街と精進池のちょうど中間付近にあります（写真 9、10）。滝廉太郎の作曲で知られる「箱根八里」で「箱根の山は天下の險 函谷關（かんこくかん） ものならず」と歌われているのも頷けます。

芦之湯温泉は、2015（平成 27）年に国民保養温泉地に指定されました。国民保養温泉地は、温泉の効用が十分に期待され、健全な保養地として活用される温泉地を国が指定する制度で、令和 2 年 11 月現在で全

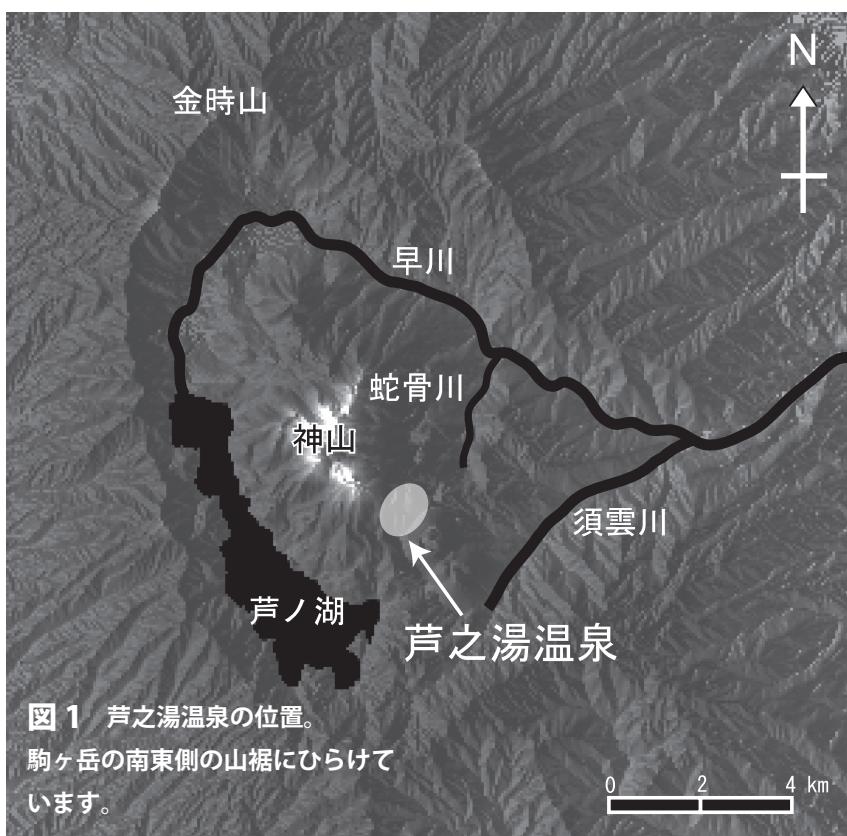


図 1 芦之湯温泉の位置。

駒ヶ岳の南東側の山裾にひらけて
います。



写真2 阿字ヶ池。箱根町が立てた看板には池の由来が書かれています。



写真3 阿字ヶ池の周辺では、芦之湯温泉がまだ湿原だった頃の名残がわずかに感じられます。池の奥には阿字ヶ池弁財天が祀られています。



写真5 厳冬期の凍結した精進池。左側に見える建物は「石仏群と歴史館」です。ここでは周辺の元箱根石仏群や芦之湯温泉のことを学ぶことができます。



写真4 精進池。その荒涼とした風景から、中世の人々は、このあたりは地獄とつながっていると恐れていました。

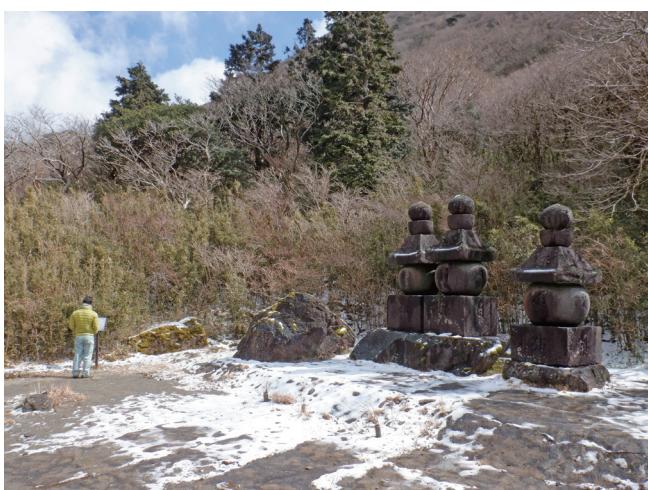


写真6 国の重要文化財に指定されている石造五輪塔。俗称で曾我兄弟・虎御前の墓と呼ばれています。1295（永仁3）年に建てられたといわれています。

国77カ所の温泉地が指定されており、神奈川県内では唯一の指定温泉地です。なお、指定された地域には、芦之湯温泉のほかに湯ノ花沢温泉の源泉地も含まれています。国民保養温泉地のことや芦之湯温泉の指定内容についてもっと詳しく知りたい方は、環境省のホームページ（<https://www.env.go.jp/nature/onsen/area/index.html>）をご覧下さい。「芦之湯温泉国民保養温泉地計画書」も

pdfファイルで見ることができます。

■芦之湯温泉の歴史

鎌倉時代の歌人である飛鳥井雅有（あすかいまさあり）が書いた紀行「春の深山路」で、1280（弘安3）年11月25日に箱根を通過する際の一節に「あしのうみのゆとて温泉もあり・・・」とあり、当時の芦之

湯温泉が山岳信仰の湯治場として記載されています。これが現在残る芦之湯温泉の最も古い記録といわれています。

先に述べたように、鎌倉時代後期から室町時代の最初にかけては、精進池周辺に石仏や石塔が造られました。鎌倉時代には湯本から芦之湯を抜けて箱根権現へと続く「湯坂路」が官道として使われており、精進池付近は険しく荒涼とした風景から



写真7 国の重要文化財に指定されている磨崖仏。二十五菩薩と呼ばれています。1293（永仁元）年から造られ始めたといわれていますが、国道1号線の開通工事で分断され、現在は道路の左右に分かれてしまいました。



写真8 写真7の磨崖仏（二十五菩薩）の近影。実は全部で26体あり、地蔵菩薩が24体を占め、阿弥陀如来と供養菩薩が1体ずつあります。箱根火山が噴出した溶岩（安山岩）に掘られています。



写真9 国道1号線の最高地点。神奈川県によって最高地点を示す看板が立てられています。



写真10 冬の国道1号線芦之湯付近。国道1号線の最高地点は画面の手前方向に進むとあります。画面奥は箱根湯本方面に向かいます。温泉街は画像の左側方面に入ったところにあります。

「地獄」と恐れられていました。そのため、湯坂路の旅人をなぐさめるための地蔵信仰の靈地となり、数多くの石仏、石塔が建てられたとのことです。

江戸時代になると、1662(寛文2)年に勝間田清左衛門が芦之湯で干拓事業を行い、現在の温泉場の基礎が造られたといわれています。そして、箱根七湯の一つとして親しまれるようになり、1817(文化14)年に大相撲の番付を模して作られた温泉番付『諸国温泉功能鏡』では、芦之湯温泉は東前頭の筆頭として、箱根温泉のなかでは最上位に位置づけられました。箱根七湯の中でも特徴的な硫黄を含む温泉が評価されたのでしょう。

江戸時代後期には、熊野権現の境内に建てられた東光庵薬師堂に本居宣長、賀茂真淵など多くの文人墨客が集まり、湯治のかたわら、句会や茶会などを楽しんでいたと伝えられています。その東光庵は、劣化のために1882(明治15)年に取り壊されてしまいましたが、2001(平成13)年に箱根町が再建し、周辺の整備も行われて、現在は往事の様

子が蘇っています(写真11)。

1889(明治22)年の町村制施行では芦之湯村が成立し、1954(昭和29)年に元箱根村と共に箱根町に合併されるまで存続しました。箱根町芦之湯に所在する源泉が、県の温泉台帳で芦之湯第〇号として登録されるのはその名残です。

芦之湯温泉では昭和時代に入っても自然湧泉だけが利用されていましたが、1959(昭和34)年に70mの井戸が初めて掘削され、ポンプを使ってくみ上げる温泉が誕生しました。その後、1963(昭和38)年には、温泉街の北西の宝蔵岳で箱根町が300mの井戸を掘削して、1965(昭和40)年から芦之湯地区に町営温泉の供給を始めました(写真12)。箱根町は、1966(昭和41)年と1967(昭和42)年にも温泉を掘削して、温泉の出でていない芦ノ湖畔にも温泉供給を始めました。

さらに、箱根町は1971(昭和46)年に湯ノ花沢に蒸気井を掘削し、芦之湯温泉として登録されている阿字ヶ池湧水を利用して温泉造成を行っています。湯ノ花沢の蒸気造成温泉については、また別の機会に

紹介します。

第二次大戦後に人気を博した作家の獅子文六による小説「箱根山」(1961(昭和36)年、朝日新聞に連載)は、芦之湯温泉の老舗である「きのくにや」と「松坂屋本店」をモデルにして創られたお話です。

■芦之湯温泉の現状

2020(令和2)年3月末現在、箱根温泉の源泉は全部で348ヶ所ですが、芦之湯温泉には11源泉(うち1源泉は休止)があり、そのうち7源泉が自然湧泉、4源泉がポンプによる揚湯となっています(図2、写真13、14、15)。

芦之湯温泉にある宿泊施設は3軒、公衆浴場は1軒です(写真16)。

2016(平成28)～2017(平成29)年に芦之湯温泉の6源泉で行われた調査結果の平均値では、温度は48.6℃、揚湯量は1分間に206リットル、pHは7.2でした(表1)。

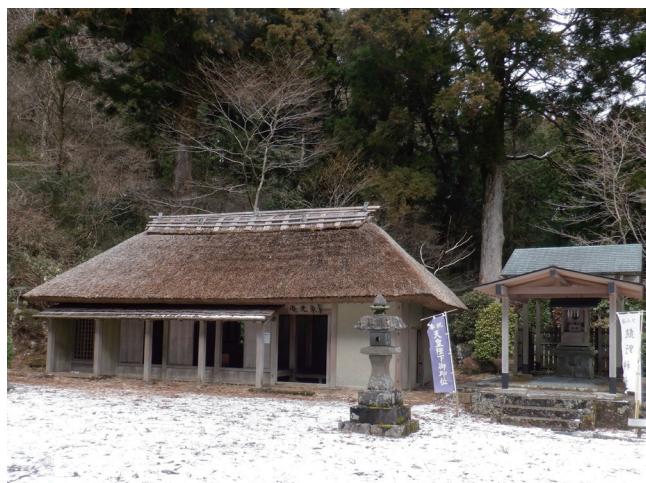


写真11 冬の東光庵。熊野神社の境内に建てられ、江戸時代には湯治客のサロンとして利用されていました。境内には、熊野神社の祠(写真右)や十六羅漢像、芭蕉の句碑などがあります。



写真12 芦之湯第10号源泉。茶色いやぐらの下が源泉です。箱根町が温泉街の北東側に掘削しました。箱根町は近傍でさらに2本の温泉を掘削し、芦之湯地区に給湯を行って利用されています。

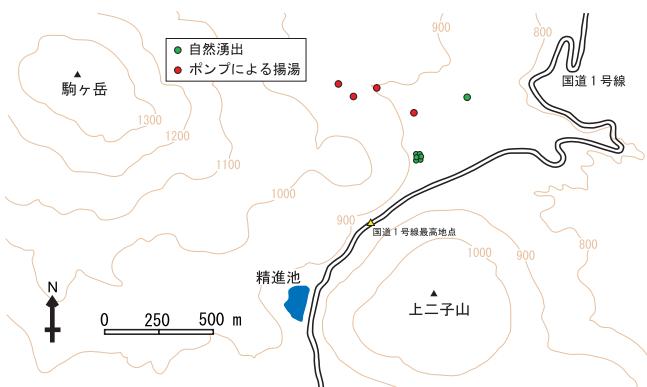


図2 芦之湯温泉の源泉分布。2020（令和2）年現在。自然湧泉の標高は850m前後です。



写真13 芦之湯第4号源泉。横穴から硫黄泉がわき出しており、硫黄が白く沈澱しています。江戸時代には黄金湯と呼ばれ湯治客に親しまれていました。

表1 芦之湯温泉の平均値。

2016(平成28)～2017(平成29)年の調査による6源泉の平均値です。

項目	平均値
温度 (°C)	48.6
揚湯量 (L/min)	206.
pH	7.18
電気伝導度 (μS/cm)	734.
ナトリウムイオン (mg/L)	53.3
カルシウムイオン (mg/L)	69.4
塩化物イオン (mg/L)	3.54
硫酸イオン (mg/L)	267.
炭酸水素イオン (mg/L)	142.
メケイ酸 (mg/L)	160.
メホウ酸 (mg/L)	0.39
成分総計 (mg/L)	732.



写真14 芦之湯第4号源泉（黄金湯）の横穴内部。奥から温泉が流れています。穴が崩れないように石組みで支えられています。



写真15 自然湧泉のそばに出現した珍しい青い温泉の池。温度は34°C程度で、成分は周辺の自然湧泉と同じでした。2018年に工事で掘った穴に現れましたが現在では見られません。ケイ素などの成分によって光の散乱がおり青く見えていると考えられます。



写真16 国道1号線から入った芦之湯温泉の風景。老舗旅館の看板が並びます。



写真 17 硫黄泉を利用した浴槽の硫化水素調査風景。管内の保健所が温泉から出てきたガス濃度を測定して安全を確認しています。

■ 芦之湯温泉の泉質

芦之湯温泉の主な泉質は、単純温泉、単純硫黄泉、カルシウム・ナトリウム・マグネシウム-硫酸塩・炭酸水素塩泉などです。温泉に溶けている成分の総計は 300 ~ 1100mg/kg 程度で、温泉旅館の集まるエリアでは硫化水素を含む中性の温泉が湧出しています（写真 17）。

箱根温泉では、硫黄や硫化水素を多く含む温泉は、大涌谷など火山活動の活発な噴気地帯でわき出しています。芦之湯温泉の北西側には湯ノ花沢の噴気地帯が広がっており、この噴気地帯の影響で芦之湯温泉でも硫黄を含んだ温泉が湧き出していると考えられています。

また、箱根温泉の噴気地帯でわき出す硫黄泉は、大部分が酸性を示しますが、芦之湯温泉では中性から弱アルカリ性の硫黄泉がわき出しているのも大きな特徴です。

今回は、芦之湯温泉について簡単に紹介しました。次回は、噴気地帯の温泉について紹介します。お楽しみに。